

# 福岡藩の蘭学者青木興勝の長崎遊学と対外認識

松本英治

Study in Nagasaki by Rangaku Scholar Aoki Okikatsu from the Fukuoka Feudal Domain and His Awareness of Things Foreign

はじめに

- ① 青木興勝の経歴と著作
- ② 青木興勝の長崎遊学
- ③ 翻刻『阿蘭陀問答』
- ④ 『阿蘭陀問答』の検討  
おわりに

## 【論文要旨】

本稿では、福岡藩の蘭学者の嚆矢として知られる青木興勝の長崎遊学の実態を、新出史料『阿蘭陀問答』を翻刻・紹介しながら検討し、長崎遊学の経験が興勝の対外認識にいかなる影響を与えたのかについて考察した。興勝の長崎遊学は、長崎警備を担当する福岡藩にとって世界地理や国際情勢の把握が不可欠であるという強い時務意識に基づいて行われたものであった。世界地理や国際情勢の研究のためには、海外情報の収集と分析が不可欠である。福岡藩の場合、長崎の蔵屋敷に間接を常駐させ、阿蘭陀通詞を掌握して海外情報の収集にあたらせていた。買物奉行として蔵屋敷に詰めていた興勝にとって、このような環境が自らの研究を進展させる大きな要因となった。当時の長崎では、ロシア船来航問題が長崎警備上の課題となり、日蘭貿易はアメリカ備船によって行われ、阿蘭陀風説書ではヨーロッパ・アジアの動乱が報じられるなど、日本をめぐる国際情勢が大きく変化していった時期である。かかる国際情勢の変

化は、興勝の対外認識に強く影響し、外国貿易の有害、「鎖国」の強化、海防の充実などといった排外的な主張を生み出した。興勝の蘭学は、純粋な自然科学の追究ではなく、長崎警備を担う福岡藩にとって必要とされた世界地理・国際情勢の研究であり、対外的危機の深まりという時務意識に基づいたものであることに大きな特徴がある。このような特徴は、ほぼ同時期に長崎に遊学して蘭学を修業した支藩秋月藩の種痘医緒方春朔と興勝の門人安部龍平の場合にも共通する。一般的に蘭学は医学・本草学などの自然科学部門から始まるといわれるが、福岡藩の場合、本格的な蘭学は世界地理や国際情勢の研究から始まる。このような背景には、長崎警備という軍役を幕府から課せられ、それゆえに階層を問わず対外的危機を強く意識させられた福岡藩の事情があり、ここに福岡藩における蘭学の濫觴の地域的特徴を見て取ることができる。

## はじめに

蘭学の地域的発達を考える場合、各地において蘭学を志す者が、いかなる関心・動機によって、いかなる方法で修業したのかという問題は、基本的ではあるが重要なテーマであろう。蘭学を学ぶにあたっては、江戸・大坂などの蘭学塾に入塾して修業することとならんで、長崎に遊学して阿蘭陀通詞との交流のなかで修業する者も多かったことはよく知られている。いうまでもなく近世の長崎は、「鎖国」下に唯一開かれた国際貿易港として、来航する唐船・オランダ船によって、海外情報がいち早く伝えられる場所であった。それゆえ、海外事情を知ろうとする者にとって、長崎遊学は異国の人・物・情報に直接触れることができる魅力的なものであった。前野良沢や大槻玄沢をはじめ、蘭学修業を目的として長崎に遊学した蘭学者は数多い。シーボルトの鳴滝塾の門下生や海軍伝習・医学伝習の参加者も同様のことである。

本稿では、福岡藩における蘭学者の嚆矢として知られ、世界地理や国際情勢の研究で業績をのこした青木興勝の長崎遊学について考えてみたい。福岡藩は、寛永の「鎖国」以来、長崎警備の任にあつたことから長崎との関係は深く、そのため数多くの者が蘭学修業を目的として長崎に遊学しており、同藩の蘭学の発達を考える上で見逃せない論点である。例えば、筑前出身で、シーボルトの鳴滝塾に学んだ者として、武谷元立・百武万里・原田種彦・有吉周平の四名が知られている。<sup>1)</sup>また、安政二年(一八五五)に始まる長崎海軍伝習には、福岡藩から二八名が参加しており、派遣人数は諸藩のなかでは佐賀藩について第二位である。<sup>2)</sup>医学の面では、嘉永期にオランダ医学の伝習のために、河野禎造(原田種彦の子)・塚本道甫・有吉文郁(有吉周平の子)らが長崎に派遣されている。その後、塚本道甫と有吉文郁は、武谷祐之(武谷元立の子)の紹介

で適塾に学び、さらに長崎に遊学して、文久元年(一八六一)に設立された長崎養生所に入塾し、ポンペの指導を受けた。<sup>3)</sup>

以上は、福岡藩における長崎遊学者の数例を挙げたに過ぎないが、このように多くの遊学者を生み出した背景には、長崎警備を媒介とした福岡藩と長崎との関係があることは多言を要しないであろう。緒方洪庵が蘭書購入にあたって武谷祐之ら適塾出身の福岡藩の医師たちに便宜をはかってもらったり、<sup>4)</sup>嫡子緒方惟準の長崎遊学に際して福岡藩の医師に後見人を依頼したりしているが、<sup>5)</sup>これも福岡藩と長崎との関係があつたことである。さらに、これらの蘭学者たちを庇護した福岡藩主黒田長溥の政治活動においても、長崎に伝えられる海外情報の収集と分析が大きな役割を果たしていたことが指摘されている。<sup>6)</sup>

本稿で取り上げる青木興勝については、専論としては杉本勲氏の研究が唯一のものである。しかしながら、杉本氏は、蘭学者としての興勝の成長が長崎遊学の成果であることは指摘されるが、長崎における蘭学修業の実態などについては史料制約もあつてほとんど言及されていない。そこで本稿では、従来、十分に検討されてこなかった興勝の長崎における蘭学修業の目的や実態について、当時の福岡藩の事情や長崎をめぐる対外問題をふまえて追究することが第一の目的である。とりわけ、福岡藩から多くの者が蘭学修業のために長崎に向かった要因である、長崎警備を媒介とした福岡藩と長崎との関係に留意して考えてみたい。また、興勝にとって長崎遊学の経験が、自らの蘭学研究、すなわち世界地理や国際情勢の研究に、どのような成果をもたらし、どのような対外認識を生み出すことになったのか。これを検討するのが第二の課題である。第一・第二の点については、興勝の長崎遊学中の著作である新出史料『阿蘭陀問答』を翻刻・紹介することで、長崎における蘭学修業の様子や対外的関心のあり方について迫ってみることにする。

さらに、以上の点をふまえて、第三の課題として、福岡藩における蘭

学の濫觴の地域的特徴について考えてみたい。各地における蘭学の発達を考えると、医学や本草学といった自然科学部門を中心に発足するのが一般的であろうが、福岡藩の場合、本格的な蘭学は、医学などの分野ではなく、興勝に見られるように世界地理や国際情勢の研究から始まっているところに大きな特徴がある。

この点について、井上忠氏は、福岡藩の蘭学の特色として、青木興勝や安部龍平のような初期の蘭学者は、古学派の亀井南冥・昭陽父子とながりをもっていたため、その蘭学受容論の影響を受けて世界地理・歴史関係の業績にとどまっていたこと、それに対して、後期の蘭学者である武谷祐之や河野禎造などは、亀井学派とは無縁であるがゆえに、本格的な蘭学を指向することができたことを論証されている<sup>(8)</sup>。また、杉本勲氏も、青木興勝の事績を通じて、興勝の蘭学が純粋な科学の追究ではなく、時務策としての政治色が強かったことを指摘している<sup>(9)</sup>。本稿では、井上・青木両氏の指摘を踏まえつつ、興勝と同じ頃に活躍した秋月藩医緒方春朔や興勝の門人安部龍平の事績にもふれながら、福岡藩の蘭学の濫觴の特徴について考えてみたい。

なお、後述するように、興勝は、長崎にあつては福岡藩の買物奉行の任にあり、厳密に言えば「遊学」ではない。しかし、蘭学修業が重要な位置を占めていたことは明らかであるから、本稿ではこれを「長崎遊学」と称させていただくことをあらかじめお断りしておく。

## ①青木興勝の経歴と著作

青木興勝は、福岡藩における蘭学者の嚆矢として知られているわりに、経歴に関する史料が乏しい。それでも、『福岡藩名家伝』を引く『筑前人物志料集』<sup>(10)</sup>に掲げられた経歴記事から、おおよそのことは知りうる。すでに杉本勲氏によって紹介されているもの<sup>(11)</sup>ではあるが、以下、主とし

てこれに拠りつつ、興勝の略歴について述べておきたい。

興勝は、通称は次右衛門、字は定遠または季方といい、五龍山人・危言狂夫と号した。宝暦一〇年（一七六〇）福岡城下地行に、藩士百野嘉内の子として生まれた。はじめ堀尾貞幹の養子となり、世伝の兵学を学んだが、業成るに及んで養父と反目し、堀尾家を去った。その後、青木武兵衛の養子となり、天明七年（一七七八）七月に青木家を継いだ。分限帳の記載に拠れば<sup>(12)</sup>、無足組で、六人扶持と切米二〇石とある。興勝は、幼少の頃より読書を嗜み、亀井南冥の門人となり、亀井塾で儒学を学んだ。学問は日々深まるところとなり、南冥に師事すること数十年、その学識ぶりは南冥に「異能の士」と目され、塾頭をつとめるに至ったという。天明四年に藩校甘棠館が創設され、南冥がその館主に任じられると、天明七年、興勝は抜擢され、弱冠一九歳にして指南加勢役を命じられた<sup>(13)</sup>。

蘭学を志した時期については明確ではないが、長崎遊学以前から対外問題には関心が深かったようである。寛政一〇年（一七九八）に甘棠館が廃止されると、買物奉行に転じて長崎に祇役し、阿蘭陀通詞についてオランダ語を学び、蘭学を修業した。帰藩後は、藩の蘭学教授となり、禄外に米一〇包を給されるようになった。そして、享和元年（一八〇一）に『蛮人白状解』を著すなど、蘭学者らしい活動が始まる。文化元年（一八〇四）九月、ロシア使節レザノフが長崎に来航すると、興勝はただちに長崎に赴き、幕府の対応が弱腰であることを嘆き、攘夷論ともいべき自己の意見を藩の有司に上申したが、全く受け入れられなかったという。これに憤激した興勝は致仕し、養子に跡を継がせて、自らは糟屋郡篠栗に隠遁した。致仕の原因となった興勝の海防・貿易などに関する意見は、『答問十策』にまとめられている。致仕後は、篠栗で門弟を集めて蘭学を教授し、その風を聞いて従学するものも多かったようである。そして、その合間に、かつて東南アジアに漂流した唐泊の水主孫

太郎を招き、その漂流談を考証して『南海紀聞』をまとめた。しかし、その校訂中に病に倒れ、文化九年六月一六日、五一歳で没した。福岡城下薬院の長円寺に葬られたというが、現在、その墓は残されていないようである。

興勝は長身で眼光鋭く、性格的には異常の熱血漢であった。時代の先覚者であったが、献策が受け入れられねば憤懣やるかたなく、妥協のできぬ不平家であったようである。友人の亀井昭陽が、『南海紀聞』に寄せた序文には、「嗚呼定遠奇士也、世怪其所為、唯我先考（亀井南冥―引用者註）謂之異能之士一録之矣、本藩之有蛮学一、自定遠始」とある。興勝は、福岡藩における蘭学者の嚆矢とされるが、藩内では奇人と目され、不遇の生涯であったといえよう。

蘭学者としての興勝の経歴をふり返るとき、師の亀井南冥から受けた思想的影響は看過できない。興勝だけでなく、内野元華、安部龍平、武谷元立など福岡藩の初期の蘭学者のほとんどは、亀井南冥・昭陽父子の門人ないしはその影響下にあった。亀井門下から蘭学者を輩出した要因については、すでに井上忠氏が詳論されており、これに導かれつつ、若干の私見も交えながら、その要点を確認しておきたい。まず、南冥・昭陽の学問系統は徂徠学派で、これが蘭学を導き出す思想的前提となった一つの要因である。最近の研究では、市井から福岡藩に登用された南冥は、儒者と同時に医者も兼ね、若い頃には古医方の永富独嘯庵に学んだことがあり、医学思想については、中国医学とオランダ流医学の折衷的立場をとったといわれる。<sup>16</sup>しかし、井上氏がいうように、南冥を蘭学に向かわせた最大の要因は、対外的危機が深まるなかで、長崎警備を遂行しなければならぬ福岡藩の特殊事情があった。天明三年、藩校設立にあたっての「諭告」では、「長崎御番所別て重き御場所柄に御坐候」というように、福岡藩に課せられた長崎警備の任務の重大さが強調されていた。南冥は、翌天明四年の甘棠館開学の際の講義において、日頃の持

論である「政事即学問、学問即政事」<sup>18</sup>を強調している。それゆえ、対外的危機が深まるなかで、時務として世界地理・国際情勢を知ろうとすることが課題となり、ここに亀井門下から蘭学者を輩出した要因があるとみてよからう。逆に言えば、西洋の自然科学の追究を目的としたわけではない。南冥の蘭学観を継承した昭陽の場合も、外国の「情」と「変」、すなわち地理と歴史を知らねばならないと主張する反面、後に鳴滝塾の学頭となった門人岡研介に詩を与え、西洋の自然科学を追究するあまり、人倫を失うことのないよう戒めるなど、儒者の経世論の範疇を乗り越えることができず、思想的限界があったことは否めない。このような亀井南冥・昭陽の蘭学観が、興勝やそれに続く蘭学者の思想に与えた影響は極めて大きい。

最後に、興勝の著作について見ておこう。興勝の著作については、先に述べたように、「蛮人白状解」「答問十策」「南海紀聞」が知られている。他に「和蘭奇談」なる著があったというが、<sup>19</sup>現存を確認することはできない。以下、これらの著作とそこに見られる興勝の対外認識について簡潔に紹介しておきたい。

『蛮人白状解』<sup>20</sup>は、寛永二〇年（一六四三）に、筑前大島に潜入したポルトガル人宣教師らの口述書に記される宗教・地理用語を興勝が注解したもので、享和元年の成立である。寛永二〇年五月、筑前大島で福岡藩に捕らえられた宣教師ら一〇名は、いったん長崎に護送された後、江戸で宗門改役井上筑後守政重らによって取り調べられた。興勝が注解を加えた口述書は、九月八日に江戸で作成されたものと見られる。興勝は、「ベシケレイヒンギ・セイロン」「暦算全書」といった蘭書・漢書を利用するとともに、長崎遊学中に出島のオランダ人から聴取した知識を披露したり、自らが長崎で目撃した絵踏の様子を紹介して考証を加えている。用語の注解は概ね正確で、とりわけ地名考証は蘭学者としての前進ぶり

を示しているというが、その一方で「釈迦『キリストス』『マゴメツテ』同ク『ホツト』ヲ奉スル教主ナレドモ、各国言語異同アリテ、訳言ノ誤等ニテ、終ニ釈氏ノ外ハ皆邪教トナレリ」といったような怪しげな見解も示している。また、口述書で宣教師が白状した布教と侵略を一体化させるカトリックの行動を、「利ヲ以テ人ヲ導キ、他地ヲ侵略スルヲ務トス、其志大ニ可憎ノ甚モノナリ」と厳しく非難する。

『答問十策』<sup>(22)</sup>は、文化元年のレザノフの長崎来航を契機として、興勝が自己の海防・貿易に関する所論をまとめた意見書である。九条の問答からなるが、適宜、その内容を整理し、興勝の対外認識についてまとめよう。日蘭貿易については、「彼ニ莫大ノ利アリテ、我ニ寸厘ノ益ナキ」と述べ、日本にとって有害であるから停止することを主張し、とりわけ金銀銅の輸出禁止を建言する。一方、日中貿易については、「彼カ帶來ル薬材一日モナクテ叶ヘカラス」という理由で、例外的に許容する立場をとる。また、前年の享和三年に長崎に交易を求めて来航したアメリカ船を論じ、拒絶した長崎奉行の対応を「鎮台神祖ノ御法度ヲ守リ、許サシテ返サレシハ、実ニ明議ナリ」と評価する。さらに、キリシタンの禁制にふれ、ロシアとて格別ではなく、「横文字ノ国ハ悉ク御制禁ト心得然ルヘキカ」と述べ、ロシアの東方進出とその野心に警鐘を鳴らし、「是ハ古ハ何船ノ例、彼ハ切利支丹、是ハ商船ナトト区々タル評議ヲ以テ是ヲ緩ヤニセハ、後悔臍ヲ嚙トモ及フヘカラス」として、新規の外交関係をもつことを否定している。以上の論点でいえば、目下の課題であるレザノフへの対応は、拒絶以外あり得ない。レザノフへの対応として、通信関係は許容できるものではなく、貿易なら許してもよいが、現状では国内の産物に余裕がないので、五〇年後に余裕があれば許容することなどを提案する。しかし、その真意は「本ヨリ絶ノ主意」にあることを強調する。

ついで、海防策を展開し、輸出用の銅で石火矢を製造するなどの武備

の充実を説き、海防強化のために参勤交代の緩和を提案している。蘭学の功罪については、「其益アリト云ハ、譬ヘハ四方万国ノ広狭遠近、其俗ノ智愚獷馴坐シテ是ヲ察シ、我経国ノ画策ニ用ユルコト」と述べ、世界地理の研究などは経世として役立つとする一方、「其害アリト云ハ、譬ヘハ彼カ天文測量ノ巧ミナルニ駭テ、徒ニ奇怪ノ説ヲ講シテ庸俗ヲ惑シ、或ハ其源詳ナラサル奇薬等ヲ用」として、天文・測量・医学などの分野についてはその科学的知識を否定する。そして、西洋を礼賛する蘭学者を攻撃し、いわゆるオランダ正月の祝宴を批判する。

以上のような興勝の主張には、強い対外的危機感が読みとれるが、全般的に儒者の経世論としての性格が強い。ただし、興勝の排外的な主張は、同時代において、必ずしも特異なものではない。興勝の長崎遊学とほぼ同時期に『鎖国論』を記述した志筑忠雄の場合も、西洋の宗教・人間への反感が明確にみられるという<sup>(23)</sup>。また、幕政レベルでは、ラクスマン・レザノフの来航とその対応を通じて、「鎖国祖法観」が打ち出され、レザノフに与えた教諭書において外国貿易が無用であることを幕府自ら明言している<sup>(24)</sup>。すなわち、幕政レベルにおいても、知識人世界においても、対外的危機感が表面化するなかで、従来の対外関係が固定的にとらえられ、排外的な対外認識が生み出されていた時期であった。ともあれ、興勝の意見は、福岡藩内で受け入れられなかったが、師の亀井南冥が自作の触れ込みで『答問十策』を水戸藩主徳川治紀に献上して、賞賛を受け、後には徳川斉昭の外国貿易拒絶論にも影響を与えたという<sup>(25)</sup>。

『南海紀聞』<sup>(27)</sup>は、唐泊の水主孫太郎の東南アジア漂流に関する編著書である。明和元年（一七六四）、孫太郎らが乗る筑前の廻船伊勢丸は暴風にあつて漂流し、ミンダナオ島に漂着した。乗組員は奴隷にさせられたり、病死したりして離散したが、その中でボルネオ島のバンジャルマシンの華僑の下男となった孫太郎ただ一人が、明和八年にオランダ船で長崎に送還された。興勝は孫太郎をしばしば招いて漂流見聞を問ひ質し、

自らの考証を加えて、漂流の顛末と滞留した各地の風俗・物産・言語などを『南海紀聞』としてまとめた。寛政六年以前に一応は脱稿していたというが、致仕して篠栗に隠遁した後も孫太郎を招き、その校訂作業に努めていたようである。『南海紀聞』は、興勝の死後、弟子の蘭学者安部龍平と金石文学者梶原景熙によって校訂され、亀井昭陽の序文を付して、文政三年（一八二〇）に刊行された。孫太郎の漂流は、当時としては珍しい南方への漂流であったため、フィクションを含めて数多くの漂流記がつくられた。その中で、『南海紀聞』は、興勝自身が、孫太郎への直接聴取をもとに、風説書・舶来書籍などによる考証を加えたものであり、その実証的内容は、当時のみならず、現在においてもボルネオ島付近の民俗を知る上での貴重な記録となっている。<sup>28</sup>

『南海紀聞』の記述のなかで、とりわけ精彩を放っているのは、一漂流民の目で見えた南方におけるオランダ勢力の拡張である。「和蘭人、文郎馬神（バンジャルマシナー引用者註）の地を拵び、商館を築くこと、城郭の如く、石火矢を備へ、要害嚴重に構へたるは、蕃酋を憚らざる様子なり」といった記述は、オランダによる植民地化の進展を如実に伝えている。また、これは当時の蘭学者に共通するところであるが、「固より蠢爾たる南蛮海陬の頑民、利を冒り生を偷むの陋俗にして、称述すべきことなし」と述べるように、南方の民に対する愚民観が根底にある。興勝は「南国の人は多愚にして、北土の人は必ず智あり」という。南方は愚民ゆえにヨーロッパ列強に侵略されるあわれな存在であるが、北方におけるロシアの強大化はその知略に基づいていると警鐘する。このようなヨーロッパ列強の東漸が、興勝の対外的危機感を増幅させたであろうことは想像に難くない。

## ② 青木興勝の長崎遊学

寛政四年（一七九二）亀井南冥の廢黜事件後、西学問所甘棠館は衰退し、寛政一〇年に同館が焼失すると廢校処分とされた。西学総請持の江上源藏、指南本役の亀井昭陽以下は解職されて平士とされ、藩中の学徒はすべて東学問所修猷館に入ることが命ぜられた。甘棠館の廢校については、藩首脳が、幕府の寛政異学の禁の趣旨によって断を下したというのが通説となっている。<sup>29</sup> もちろん、指南加勢役であった青木興勝も解職された。しかしながら、興勝は買物奉行に任じられ、長崎において蘭学を本格的に学ぶ機会を得た。杉本勲氏は、甘棠館の廢校処分という状況のなかで、「興勝が買物奉行に任ぜられたのは、異例といえるであろう」と述べておられるが、なぜ「異例」にも長崎に遊学することができたのかについては検討されていない。まずはこの点について、当時の対外情勢と福岡藩の事情から考えてみよう。

寛政期は、ロシアの接近が現実の問題となり、幕藩領主に対外的危機が認識されていた時期である。寛政四年、ロシア使節ラクスマンが根室に来航し、漂流民の送還とともに通商を要求した。老中松平定信を中心とする幕府は、要求を拒絶してロシアとの紛争を引き起こすことを恐れ、通商開始をも覚悟し、ラクスマンに長崎入港許可証である信牌を授けることにした。<sup>30</sup> これを受けて長崎では、西国一四藩の間役を呼び出し、信牌を持参するロシア船の来航が予想されることを通達し、ここにロシア船来航時の警備問題が浮上したわけである。とりわけ、佐賀藩とともに長崎警備を課せられた福岡藩にとつて、その対応は急務であった。詳細については別稿で論じたので繰り返さないが、福岡・佐賀両藩は長崎警備の強化のために石火矢を献上したり、長崎間役が阿蘭陀通詞を介して熱心に海外情報の収集につとめるなど、かなり積極的な対応が行われ

ている。このような状況下において、福岡藩では、世界地理や国際情勢を知る手段として蘭学が評価され、『南海紀聞』の編纂に手をつけるなど、対外問題に関心が深い興勝が注目されたのであろう。

また、ときの福岡藩主黒田斉清は、後に蘭癖大名として知られるが、このときわずか四歳の幼少で、長崎警備は支藩の秋月藩主黒田長舒に任されていた。<sup>(35)</sup>ここで注目しておかなければならないのは、亀井南冥と黒田長舒の関係である。南冥は、甘藷館開館以来、秋月藩とは縁が深く、南冥の廢黜事件後も、長舒は、南冥が著した『論語語由』に序文を寄せするなど、その親好はほとんどかわりなかった。<sup>(36)</sup>ならば、興勝の長崎遊学に関しても、南冥・長舒の両者が様々な便宜をはかったのではないかと思われる。

当時、興勝が親しく交友していた人物に内野元華がいる。<sup>(37)</sup>元華は、福岡藩士として長崎警備の任をつとめたこともあって、西洋事情にも関心を持ち、日本と中国・西洋との農政事情などを念頭におきながら、福岡藩における殖産興業策を提唱した『済民草書』などの著書がある。興勝より一七歳年上ながらも、南冥に師事した同門の間柄であったため、両者は親しく交際していたようである。元華は、「青木五竜の長崎に行くを送る」と題した次の詩を詠んでいる。<sup>(38)</sup>

知君已到長崎陽 征戌年々此慕兵  
只道一人通万国 初知西客達東洋  
曾憐天馬長傳種 今看芳蘭猶有香  
白髮斯翁若相問 風流独臥大明堂  
吾藩久保鎮西台 列士如雲勢壯哉  
夜静群營連絶壁 天寒大炮動迅雷  
猶聞華客包第入 更説蘭人重訳来  
西域典書稀解者 非君誰是此文開  
ヨローパ列強の東漸という状況のなかで、長崎警備を担当する福岡

藩の重責を強調する。このようななかで、元華が果たし得なかった蘭学の本格的修業を興勝に託し、長崎遊学の快挙を激励して祝福した詩である。興勝の長崎遊学は、亀井一門の悲願でもあったのである。

さて、従来、長崎遊学中の興勝の様子は、杉本勲氏が紹介する『筑前人物志料集』の略伝から知り得ることに限られていた。私見を加えたい箇所もあるので、関係部分を以下に引用する。

寛政年間、館廢せられ買物奉行に転じ長崎に祇役す、我福岡藩は世々長崎辺鎮を領すれとも、鎖国の久しき、毫も海外の情勢を知るものなし、慨然謂らく彼か情状を諦知せんと欲せば、宜く彼れの書を読まざるべからすと、和蘭訳官猪股某に就て蘭語を学び、匪勉刻苦殆んと寢食を忘るに至る、藩侯其志を嘉みし学資若干を給与す、固より不撓の精神を有して志を立たるに、又藩の助を得たるを以て、騏驥王良に遭て愈々駿なるに似て、其進歩神速、忽ち別て機軸を出す、寛政十二年職を免し、一代蘭学教授を専任する事を命す、其料に禄外に毎年米拾苞を給せらる。<sup>(39)</sup>

まず最初に確認しておきたいのは、興勝は長崎においては、買物奉行の任にあり、福岡藩の蔵屋敷に詰めたということである。西国諸藩が長崎に設置した蔵屋敷については、次の三つの機能があるという。<sup>(40)</sup>第一は、藩と長崎奉行所との間の政治的連絡・折衝である。奉行所からの諸事連絡を国元に伝達したり、軍役として課された長崎警備を長崎奉行の指示のもとで円滑に遂行することが求められた。そのために、海外情報をはじめとする公式・非公式の情報を収集・伝達することが必要であった。第二は、国産品の販売や貿易品の購入である。長崎町人を御用達商人として、聞役のもとで事務処理を行わせるなど、蔵屋敷は専ら長崎市場と藩とを結ぶ経済的な機能をもった。<sup>(41)</sup>第三は自国出身の旅人・商人の人的掌握である。これは、往来手形の確認と武士の添状発給などで、自国出身者を蔵屋敷のもとで掌握しておく必要があった。つまり長崎の蔵屋敷

は、人的・物的関係が交錯する情報ネットワークの中心にあり、興勝の長崎遊学にとって有利な環境であった。

興勝が任務とした買物奉行とは、蔵屋敷における第二の任務と関わりあうものである。分限帳の記載によれば、<sup>(42)</sup>「役料米八俵、小者給米拾貳俵」とあり、無足組の藩士が就任する役職であった。長崎の蔵屋敷における買物奉行の任務は、総責任者である長崎聞役の下にあって、貿易品を購入することにある。進物用の舶来品や藩主や藩主の子女の使用品、あるいは幕府や他藩への贈答品などを注文に応じて購入することを考えれば、<sup>(43)</sup>極めて重要な役割であった。一方で、このような貿易品の売買への関与は、興勝に奢侈品・医薬品の輸入や銅の輸出などの現状を知らしめ、ひいては『答問十策』で主張する外国貿易無用論を生み出す要因になったと考えられる。

オランダ語の習得に関しては、「和蘭訳官猪股某」について学んだという。この「猪股某」については、杉本勲氏は未詳としつつも、文化九年（一八一二）の『長崎諸役人并寺社山伏』に記載されている小通詞末席の猪股伝次右衛門のことではないかと推測している。<sup>(44)</sup>筆者もこの見解には異論がない。というのも、伝次右衛門は、福岡藩と密接な関係にある阿蘭陀通詞だからである。<sup>(45)</sup>この点を確認しておくことにしよう。猪股伝次右衛門は、名を昌永といい、『ゾーフハルマ』の反訳校訂につとめるなど頗るオランダ語に通じ、その語学力・学識はシーボルトも高く評価するところであった。文政九年（一八二六）に没したことは知られているが、生年は未詳である。しかし、寛政八年に長子源三郎が誕生しており、興勝が長崎に遊学していた当時には、すでに青年の域に達していたことは疑いない。

ところで、福岡藩の藩政史料のなかには、『阿蘭陀沓番船式番船之風説書并諸書付』<sup>(46)</sup>と題した史料が残されている。これは、文政二年の風説書・積荷目録・乗船員名簿の写しであるが、末尾には「右之通御座候、

以上」「卯六月廿四日 猪股伝次右衛門」という記載があることから、伝次右衛門が福岡藩に呈上したものであると判明する。阿蘭陀風説書などの海外情報は、表向きは他見をはばかる機密情報であった。しかし、長崎警備に関わる西国諸藩にとって、情報の有無は藩の存亡に関わる一大事であるため、翻訳にあたる阿蘭陀通詞を「御出入通詞」などとして掌握し、長崎聞役を通じてこれら機密情報の収集・伝達にあたっていたのである。<sup>(47)</sup>

以上の点から考えれば、伝次右衛門は、たんに興勝にオランダ語を教授したというだけでなく、機密とされる海外情報の提供者であったと考えられる。このような阿蘭陀通詞から得た海外情報が、興勝の対外認識の形成に果たした役割は大きいであろう。

興勝が蘭学を学ぶにあたっては、『筑前人物志料集』の記述から、福岡藩当局の援助があったことがうかがえる。これを裏付ける史料を、以下に掲げよう。

#### 買物奉行

青木次右衛門

去年年長崎表江為詰方被指遣置候処、和蘭学一件二付、無抛物入多、内々致困窮候趣相達、依之以別儀、銀子壹貫八百七拾目拜領被仰付候事、

寛政十二年七月十六日<sup>(48)</sup>

すなわち、蘭学修業に費用がかかって困窮している興勝に対して、寛政一二年七月、藩が学資を給与したことが確認できる。ここで「和蘭学一件」と断っていることから、興勝の蘭学修業は、福岡藩の公務の一環として位置づけられていたことが明らかである。長崎遊学中の興勝は、「不撓の精神」を持って取り組んだ結果、蘭学修業は「其進歩神速、忽ち別て機軸を出す」という上達ぶりだったというから、何かと勉学の費用がかかったのであろう。支給された「銀子壹貫八百七拾目」は、かな



りの大金である。おそらくは、買物奉行という立場を利用して、蘭書購入の費用として使われたものと思われる。

『筑前人物志料集』によれば、興勝は寛政一二年には買物奉行の職を免じられ、帰藩して初代蘭学教授に任じられたという。このことは、興勝の経歴のなかで通説となっているが、異論があるので検討しておく。

興勝が、帰藩した事情については、従来、何も説明されてこなかったが、この点に関して、『通航一覽』は『嘆詠余話』の次のような話を掲げている。

享和元年、肥前国五島へ、印度の南島地閣チメルといふ所を出帆せし乗合船一艘漂着ありしを、長崎港へ相廻され、御吟味ありし時、筑前の家士青木某といふもの長崎屋敷に詰合しか、此男頗諸蛮国の事弁へしものにて、其節通事かたよりの書上を見て、地名相違のよし何心なくいひければ、通事等不快に思ひて、其間役まで云々の事断りし故、抛なく青木は本国へ差戻されしよし、予近頃其伝説を聞き、其地名如何間違しを語りし等の次第は聞されとも、曾て其頃の通事の書上を得て写し置るあり、最初の書上に、水夫之内には、ボルネヲ、リユコリアと申所之者も罷在云々、又後には、乗組の内、リユコリニヤ、又ルソンの者も有之候由、併何れも洋中にて死去云々、又一通には、ボルネオ国之内、リユソンと申所之者有之、右呂宋国之内、リユソンにては無御座候云々、これ前後申紛しなり、青木は通事の仕癖を知らず、思ひしま、を不審せしなるへし<sup>49</sup>

ここでいう「青木某」が、興勝を指すことは言うまでもない。この史料で述べられている五島への漂着船の長崎における対応とは、以下の通りである。享和元年（一八〇一）九月二日、五島にヨーロッパ船が漂着した。漂着船は長崎まで回航され、九名の乗組員は長崎奉行所のもとで取り調べを受けた。その結果、乗組員はアンボン出身の男女七名と中国人二名と判明し、翌年、乗組員九名はそれぞれオランダ船と中国船で送

還されることになった。取り調べにおいて、この漂着船はアンボン船として扱われていたが、<sup>50</sup>実際はマカオ仕立てのポルトガル船で、漂着民九名がポルトガル領土の住民であることは、オランダ商館長ワルデナールや荷倉役ドゥーフが行った訊問によって明らかであった。長崎奉行成瀬因幡守正定と阿蘭陀通詞らは、制禁のポルトガル船であることが幕府に知られ、処刑を命ぜられるのを避けるために、この漂着船をアンボン船ということで処理したのである。<sup>51</sup>

禁制とされているポルトガル・スペインに關係する漂流・漂着の場合には、国名・地名を偽って処理するのが阿蘭陀通詞や唐通事の仕来りとなっていたと思われる。阿蘭陀通詞は、慣例に従って地名を偽ったのであるが、このことを興勝に指摘され、癪にさわったのであろう。阿蘭陀通詞は、福岡藩の間役まで「云々の事断りし」というが、これは機密とされる海外情報の提供を断るということと思われる。間役にしてみれば、以後の情報収集に支障が出ては困るので、仕方なく責任をとらせるかたちで興勝を帰藩させることにしたのである。

以上の事件は、享和元年の出来事であるから、興勝の帰藩と蘭学教授への就任は、通説となっている寛政一二年ではなく、享和元年と訂正されなければならない。また、この事件は、ポルトガル・スペイン領からの密入国によるキリスト教布教の危険性を、興勝に強く抱かせたと考えられる。同年に『答問十策』を著した直接の動機は、この事件によるものであろう。また、『答問十策』において、「臥亜・呂宋等ノ地ニ至ル者回ルトキハ斬罪ノ法ナリ」と強調するのは、国名・地名を偽る阿蘭陀通詞の仕来りを批判することにあつたに違いない。





#### ④『阿蘭陀問答』の検討

一読するに、「未」の年に、ある人物が「吉雄幸朔」とともに出島に出向いた際、「地理及び欧邏巴諸国之只今之模様」について、「ゲイ子マン」とかわした十カ条の問答録であることがわかる。まずは、この『阿蘭陀問答』が、青木興勝の著作であることを確定したい。

興勝は、『蛮人白状解』において、

予曾テ西洋館ニ至リ、欧羅巴人ロインドルト・ゲイ子マンスト云ル者ニアヒ、彼国ノ天文地理兵術等ノコトヲ聞ク、ゲイ子マンズ諸書ヲ講説スルウチ、間々教法ノ片端其言ニアラハル、事アリ

と記し、長崎遊学中に出島に出向いて「ゲイ子マンズ」から聞いた知識を披露しており、この点は、『阿蘭陀問答』の内容にたいへんよく符号する。

「ゲイ子マン」は、レナルド・ヘーネマンズのことである。ヘーネマンズは、ヘンミーが商館長を務めていたところに、長崎に滞在していた商館員補で、一八〇〇年（寛政一二）一〇月に、無断で積荷目録を日本側

に手渡した廉で罷免されたことが知られている。<sup>(52)</sup>

「吉雄幸朔」は、「吉雄幸作」の誤記であり、阿蘭陀通詞吉雄幸左衛門耕牛を指していることは疑いない。吉雄耕牛については、詳細は片桐一男氏の研究に譲るが、通詞職のかたわら、家塾成秀館を主催し、各地からの多数の門人が集まり、紅毛流外科の伝播に功績があったこと、吉雄邸の二階は輸入品の調度などをもってしつらえ、「オランダ坐敷」と呼ばれるほどであつて、いわゆるオランダ正月の賀宴も催されていたことなどがよく知られている。また、『解体新書』に序文を寄せるなど、杉田玄白ら江戸の蘭学者との交流も深く、江戸蘭学の形成に大きな役割を果たしたことも周知であろう。寛政二年に誤訳事件で塾居を命じられていたが、寛政八年には「塾居差免」となり、寛政九年には年少の通詞に対しての「蛮学指南」を命じられていた。この間、寛政七年には、『魯使北京紀行』を翻訳するなど、対外問題にもひとときわ関心が深かった。

寛政一二年八月に死去するまで、若い阿蘭陀通詞や門下生の指導にあつていた。

ヘーネマンズの在任期間で、かつ吉雄耕牛の生前という条件を満たす「未」の年は、寛政一二年であるが、この年は、興勝が長崎に遊学していた時期とも矛盾しない。また、末尾の「右之問答私義一分之力に及不申候ニ付幸朔相談ニ而承候処ニ而御座候」という一文から、オランダ語の学習を始めているが、まだ日が浅く会話に不自由している人物の著作であることがわかる。当時の福岡藩の状況を見渡すに、これに該当する人物は興勝をおいて他には考えられない。また、三奈木黒田家文書には、興勝の著作である『蛮人白状解』も含まれており、史料の伝存の点から考えてみても不自然ではない。そして、何よりも『蛮人白状解』の記述から、興勝とヘーネマンズとの間に問答があつたことを裏付けている。以上のことから、『阿蘭陀問答』の著者が青木興勝であると断じて問題ないと考えられる。

『阿蘭陀問答』を検討するにあたって、まずもって注目されるのは、吉雄耕牛が、長崎における興勝の蘭学修業に関わっていた点である。興勝の師である亀井南冥は、若い頃、讃岐の合田求悟から耕牛の西洋医学の話聞いて西洋医学の実証主義に感激したという。<sup>54</sup>興勝は南冥から耕牛の名は聞き及んでいたであろうし、もとより耕牛は長崎で最も著名なオランダ通詞であったから、興勝自ら進んで蘭学修業のために関わりを持つとうと考えたのだろう。興勝が、『答問十策』において、批判しつつも阿蘭陀正月の賀宴に触れているのは、吉雄邸でこの賀宴が行われていることを聞いた、あるいは参加したためであろう。興勝が医学を学んだ形跡は見られないので、耕牛の門弟というわけではなからうが、長崎における蘭学修業において、耕牛から受けた影響は少なくないと思われる。さて、それでは『阿蘭陀問答』の具体的内容を検討しつつ、長崎遊学中の興勝の対外的関心のあり方について考えてみたい。便宜上、①から⑩の問答の順番に従って、考察を進めることとする。

①と②は、特に取りあげるべき内容はないが、ヘーネマンズの出身地と渡航地についての問答である。ヘーネマンズの出身地「ロストック」は、現在のドイツのロストックのことである。また、渡航地については、「エンゲラント」はイギリス、「イルラント」はアイルランドのことであるが、「智加」「エーラント」がいかなる地方を指すのか、いささか判然としないところがある。

③は、北アメリカの「コルホニヤ」についての問答である。「コルホニヤ」は、当時、毛皮貿易で栄えていたカリフォルニアのことであろう。「コルホニヤ」は良港だと聞いているが、どのようなヨーロッパ諸国が来航するのかという興勝の質問に対して、ヘーネマンズは、世界一の大きな港で、フランス・スペイン・ロシアなどの商船が来航し、ヨーロッパ諸国はこの地に商館を置き、交易していると答えている。興勝のアメリカへの関心の背景には、当時の長崎をめぐる対外問題がある。この時

期の日蘭貿易は、フランス革命とそれに伴うヨーロッパの変動を受けて、寛政九年以降、アメリカ船を中心とする中立国備船によって行われていた。<sup>55</sup>とりわけ、寛政一〇年一〇月にアメリカ備船イライザ号が暴風雨によって長崎港内で座礁する事件が発生した。その後、周防櫛ヶ浜の漁師村井喜右衛門の尽力によって引き揚げられるまで、およそ三カ月間にわたってイライザ号は沈船として港内に横たわり、長崎の衆目の関心を集めるところであった。<sup>56</sup>この一件は、長崎に遊学中の興勝も目にしたはずで、ひいては備船を送り出したアメリカへの関心を生み出したものと思われる。また、『答問十策』によれば、イライザ号の船長スチュワートにも会ったことがあるという。享和三年（一八〇三）に私貿易を試みようとして来航したスチュワートの意図を『答問十策』で論じていることを考えれば、興勝のアメリカへの関心は長崎遊学のときに起因するものと思われる。

④から⑥は、東南アジア・オーストラリアに関する地理的な問答である。④は、ルソンがイスパニアの領土であることは今でも変わらないかという質問で、ヘーネマンズは今でもイスパニアの領土であると答えている。⑤は、「強盗島」に行ったことがあるかどうかという質問である。「強盗島」はマリアナ諸島のことである。ヘーネマンズは、「強盗島」は日本から見て南方近くにある島だが、島人が害を加えるので諸国の船は近づかないと言い、小島が多く、取り立てての産物もないと答えている。⑥は、「新阿蘭陀」に関する問答で、オランダ本国の人は住んでいるのか、原住民はいるのかという質問である。ここでいう「新阿蘭陀」とは、現在のオーストラリアのことである。「新阿蘭陀」は、百年前からオランダ本国と通船しており、ジャワの近くにあるため、時々「新阿蘭陀」の港にも行くが、荒地のために開発も行えず、原住民も悪いものが多いので教え導くこともできないとヘーネマンズは答えている。いずれも興勝が関心を抱く地理的な疑問を問い質したもので、アジア方面へ

の強い関心は、後にまとめられる『南海紀聞』に通じるものがある。

⑦から⑨は、最近のロシア事情についての問答である。⑦では、興勝は、ロシアに行ったことはあるか、またロシアの女帝は死去したと聞いているが、現在はどうなっているかと尋ねている。これに対して、ヘーネマンズは、デンマーク・ノルウェーなどロシアの近国に行ったことはあるが、ロシアには今まで行ったことはないという。そして、女帝は賢女で政治的力量もあったが、すでに死去し、現在は王子が跡を継ぎ、変わるどころなく国も治まっていると答えている。⑧は、露土戦争についての問答で、トルコとロシアは敵対関係にあり、国王の命により国境を守るため紛争が続いているという。また、ヘーネマンズ自身がトルコ首都コンスタンチノープルに行った経験を披露し、トルコの繁栄ぶりを指摘している。⑨は、ロシアと中国の交易に関する問答で、興勝はロシアと中国の貿易は変わったと聞いているが、それは何故かと質問している。ヘーネマンズはこれに対して、三〇年以前に中国の商人が無理なことをしたので商売が一時中断したが、現在は和睦したので、以前と同様に交易していると答えている。以上において、とりわけ⑦と⑧は、寛政九年の阿蘭陀風説書で、「リユス国<sup>57</sup>之女帝逝去之末、トルコ国と及戦争申候」と報じられていることを受けて質問に及んだものであり、興味深い。この件については、翌寛政一〇年の風説書にも露土戦争においてフランスとトルコが同盟したという統報がある。<sup>58</sup>寛政九年の風説書は、フランス革命に伴うヨーロッパの動乱、イギリスによるアジアのオランダ植民地の侵略、ロシアの女帝エカテリーナ二世の死去などを長文で報じたもので、日本にとって憂慮される内容を含んでいた。とりわけ、エカテリーナ二世の死去は、幕府・諸藩にとって急務であるロシア問題の根幹に関わることに、杉田玄白・近藤重蔵ら多くの識者の注目を集めた。<sup>59</sup>ラクスマンへの信牌授与によって、ロシア使節の長崎来航が予想されておき、長崎警備を担当する福岡藩にとって、ロシアの動向は何とも

気になる場所であった。それゆえ、興勝は、風説書で報じられた内容をより深く知らんがために、かかる質問に及んだものと考えられる。

⑩は、最近のヨーロッパ情勢についての問答である。ヨーロッパにおいては、ロシア・トルコ他ではどの国が強いのか、最近フランスが強大化していると聞いているが、それはどのような事情かという質問である。ヘーネマンズは、オランダ本国からの書簡を読みながら、フランス革命に伴うヨーロッパの変動について説明している。興勝がこの点の質問に及んだのは、阿蘭陀風説書によってヨーロッパの変動とフランスの強大化を知っていたためである。フランス革命については、第一報は勃発してから五年後の寛政六年の風説書で報じられ、翌寛政七年の風説書ではフランス国王ルイ一六世の処刑の記事がある。<sup>60</sup>以後の風説書でも、毎年のようにフランス革命の進展とそれに伴うヨーロッパ・アジアの変動が報じられているから、海外情報に敏感な識者にとって、ヨーロッパ・アジアで憂慮される異変が起こっていることは十分認識されることろだった。しかし、風説書による断片的な情報だけでは、その情報分析は自ずと限界があり、それゆえ、興勝はこの点についての質問に及んだわけである。ヘーネマンズの回答は、ルイ一六世の治世とフランスの強大化、そして革命の勃発、その後の革命の展開を説明したもので、興勝は、諸国に戦いを挑むルイ一六世の豪傑ぶりと、キリスト教の僧官の弾圧が革命の勃発を招いたととらえたようである。なお、風説書などオランダが提供する海外情報は、フランス革命に伴うヨーロッパの動乱を、オランダにとって都合のよいように歪曲し、必ずしも事実を正確に伝えていることはないことは従来から指摘されている。<sup>61</sup>この問答においても、フランス革命に伴う動乱の中で、オランダがフランスによって解体され、パタゴニア共和国が成立したことなどについては、ヘーネマンズが全く触れていない点には注意しておかなければならない。

## おわりに

以上、従来知られていなかった青木興勝の長崎遊学の実態を、新史料を紹介しながら検討し、その経験が興勝の対外認識にかなる影響を与えたのかについて考察してみた。興勝の長崎遊学は、長崎警備を担当する福岡藩にとって世界地理や国際情勢の把握が不可欠であるという強い時務意識に基づいており、亀井一門の強い囑望のもとで行われたものであった。この点については、すでに井上忠・杉本勲両氏によって強調されているが、本稿の検討を通じても再確認されることである。世界地理や国際情勢の研究のためには、海外情報の収集と分析が不可欠である。長崎警備を担当する福岡藩の場合、長崎の蔵屋敷に閑役を常駐させ、阿蘭陀通詞を掌握して海外情報の収集にあたらせていた。買物奉行として蔵屋敷に詰めていた興勝にとって、このような環境が自らの研究を進展させる大きな要因となったのである。興勝が遊学していた時期の長崎では、ロシア船来航とその警備が問題となるだけでなく、日蘭貿易はアメリカ備船によって行われ、阿蘭陀風説書ではヨーロッパ・アジアの動乱が報じられるなど、日本をめぐる国際情勢が大きく変化していった時期であった。かかる国際情勢の変化は、興勝の対外認識に強く影響し、外国貿易の有害、「鎖国」の強化、海防の充実などといった排外的な主張を生み出したのである。

最後となったが、以上の検討・考察をふまえて、福岡藩における蘭学の濫觴の地域的特徴について考えておきたい。繰り返しになるが、興勝の蘭学は、純粹な自然科学の追究ではなく、長崎警備を担う福岡藩にとって必要とされた世界地理・国際情勢の研究であり、対外的危機の深まりという時務意識に基づいたものであることに大きな特徴がある<sup>62</sup>。このような特徴は、たんに興勝の資質や趣味の偏りだけで説明できるもの

ではない。ここに福岡藩における蘭学の濫觴の地域的特徴があるわけだが、この点について、ほぼ同時期に長崎に遊学して蘭学を学んだ二人の人物、すなわち支藩秋月藩の種痘医緒方春朔と興勝の門人安部龍平の場合を見ながら確認しておきたい。

緒方春朔は、寛延元年（一七四八）久留米藩士瓦林清右衛門の子として生まれた<sup>63</sup>。後に同藩の医師緒方元斎の養子となり、養家の下から長崎遊学に出され、吉雄耕牛に入門して蘭学や西洋医学を学ぶとともに、『医宗金鑑』を読んで種痘に関する知識を得たという。その後、春朔は養家を去って秋月に移り、寛政元年（一七八九）に秋月藩主黒田長舒によって藩医に登用された。そして、寛政二年以降、春朔は独自の研究を加えた人痘法を秋月領内で実行して成功をおさめた。春朔の名声は高まり、各地から春朔のもとに従学する者も多く、門人帳には六九名が記載されている。また、寛政七年に春朔が著した『種痘必順弁』は、本邦初の種痘書として知られている。春朔の長崎遊学は数次にわたったようで、次に掲げるのは、寛政五年に出島でオランダ人と問答したことを示す『種痘必順弁』の一節である。

寛政癸丑ノ春予崎陽ニ客遊ス、高木氏ニ倍シテ西洋館ニ入ル、瘍科  
且天儀地理ヲ論スルカ為ニ、官ノ免許ヲ蒙リ、蘭客ト会シ（中略）  
訳司堀石橋ノ二氏ヲシテ語ヲ通シ天文地理等ノ説ヲナシ、内外治療  
ノ訳ニ及フ<sup>64</sup>

種痘の功績の陰に隠れてしまい、ほとんど注目されていないが、右の記述にも見える通り、春朔は天文や地理の研究も行っていた。春朔は、藩医であると同時に秋月藩の天文方も命じられており、司馬江漢と交友を持ち、万国地理を記した『地球図略説』の著書もある。『地球図略説』は、生徒のために平易に編集した啓蒙地理書で、おそらくは藩校稽古館で使用されたものであろう。このような背景には、本藩の幼少の藩主に代わって長崎警備を監督せざるを得なかった秋月藩の事情がある。春朔

の天文・地理の研究は、たんなる医者之余儀ではなく、藩から課せられた任務の一環であることをふまえれば、対外的危機の深まりのなかで、長崎警備を遂行しなければならない秋月藩の時務意識に応じたものと考えられる。

安部龍平は、天明四年（一七八四）、博多湾に臨む福岡の東郊名島村で、百姓清蔵の子として生まれた。<sup>(65)</sup> 亀井昭陽との親好ぶりから亀井塾の出身と思われる、そこで知遇を得た興勝の門人となり、蘭学を学ぶことになったのであろう。そして、さらなる蘭学修業のために長崎に遊学し、同じく遊学中であった大槻玄幹の紹介を得て、志筑忠雄の門人となった。龍平の最初の業績は、文化三年（一八〇六）になった『二国会盟録』で、ネルチンスク条約の締結過程について述べた蘭訳本を病床の志筑が口訳し、それを龍平が筆記したもので龍平自身の意見も多い。翻訳の動機は、志筑と龍平が間近に見たレザノフの来航にあることはいままでもない。

龍平は、興勝と同様にアメリカにも関心が深く、文化一三年には、アメリカの地理・歴史を記した『新宇小識』の初稿を著した。この間、福岡藩士安部忠内の養子となり、文政二年（一八一九）に直礼城代組に抜擢され、士籍に列せられた。その後は、蘭癖とよばれた藩主黒田斉清の片腕として活躍し、斉清とシーボルトの問答をまとめた『下問雑載』や、斉清の海防論に補注を加えた『海寇窃策』を著した。龍平の蘭学も、興勝の蘭学と同様に、世界地理・国際情勢の研究に限定されるのが大きな特色である。

龍平は蘭畝・蘭圃と号したが、これは村の出身であることを生涯忘れぬためであるという。村から世界地理や国際情勢の研究を志す蘭学者を輩出した背景は、やはり福岡藩をめぐる地域的特徴がある。玄界灘に面した浦は浦奉行の支配下におかれ、浦の民衆は長崎警備の水夫役を課せられていた。また、玄界灘に面した沿岸や島々には、遠見番所がおかれ、中国船・朝鮮船の漂流・漂着や密貿易、さらには異国人の侵入などを監

視する体制に組み込まれていた。<sup>(66)</sup> 寛政期には、ロシア船来航時の対応が浦においても課題となるなど、対外的危機の深まりは福岡藩内の民衆とは無縁ではなかった。龍平が生まれた名島村は、多々良川右岸に位置し、博多湾に面する小村で、郡奉行の支配下ではあるが、箱崎浦に隣接しており、福岡・博多市中との商業取引もあった。<sup>(68)</sup> 佐渡の宿根木村出身の蘭学者柴田収蔵が、世界地理の研究を志した要因として、佐渡をめぐる外圧が強調されているが、龍平の場合も幼年時代の玄界灘をめぐる同様の状況があつたのである。

種痘医が藩命によつて世界地理の研究を行い、村から世界地理の研究を志す蘭学者を輩出する背景には、長崎警備という軍役を幕府から課せられ、それゆえに階層を問わず対外的危機を強く意識させられた福岡藩の事情がある。ここに福岡藩における蘭学の濫觴の地域的特徴を見て取ることができるであろう。

註

- (1) 呉秀三「シーボルト先生其生涯及功業」(復刻版) 名著刊行会、一九七九年、七四四～七五〇頁を参照。
- (2) 井上忠「蘭学」(福岡県史) 通史編・福岡藩文化(上)、福岡県、一九九三年、三七八頁を参照。
- (3) 同右、三七二頁を参照。
- (4) 村田忠一「緒方洪庵の蘭書購入の実態」(科学史研究) 第二一〇号、一九九九年、六七頁を参照。
- (5) 奥村武「九州大学医学部前史」(九州大学医学部七十五年史) 九州大学、一九七九年、五八六頁を参照。
- (6) 岩下哲典「幕末日本の情報活動」雄山閣、二〇〇〇年、二八八～三〇五頁を参照。
- (7) 杉本勲「筑前蘭学事始考―青木興勝の事歴を通じて―」(九州文化史研究所紀要) 第一二号、一九六七年。
- (8) 井上忠「福岡藩における洋学の性格」(藤野保編「九州と思想・文化」国書刊行会、一九八五年)。



- (9) 前掲、杉本「筑前蘭学事始考」。
- (10) 『筑前人物志料集』一（福岡県立図書館所蔵太田資料）。『筑前人物志料集』は、福岡藩士の略伝を編纂した草稿本で、全三冊から成る。同書の編纂意図などは未詳であるが、「福岡県中央図書館長太田光次」「昭和 年 月 日」などと記された反故の紙背を利用して書かれている箇所があり、昭和初期に福岡県中央図書館長であった太田光次氏が、諸書を参照して編纂した未刊の福岡藩士の略伝集ではないかと思われる。以下の記述は、特に断らない限り、同書収録の青木興勝の経歴記事に拠っている。
- (11) 前掲、杉本「筑前蘭学事始考」三六～四一頁。
- (12) 福岡地方史研究会編『福岡藩分限帳集成』海鳥社、一九九八年、二二三頁。
- (13) 『日本教育史資料』（復刻版）第五卷、臨川書店、一九六〇年、二九七頁。
- (14) 『南海紀聞』（荒川秀俊編『異国漂流記統集』気象研究所、一九六四年）三頁。
- (15) 前掲、井上「福岡藩における洋学の性格」二八二～二九三頁。
- (16) 吉田洋一「亀井南冥の医学思想」（洋学史学会研究年報『洋学』九、二〇〇〇年）七～一四頁を参照。
- (17) 『日本教育史資料』（復刻版）第三卷、臨川書店、一九六〇年、二頁。
- (18) 『役藍泉宛亀井南冥書簡』（亀井南冥・昭陽全集）第八卷・上、葦書房、一九八〇年）五八〇頁。
- (19) 三松莊一「福岡県先賢人名辞典」（復刻版）葦書房、一九八六年、四頁。なお、『国書総目録』第一巻、岩波書店、一九六三年、一八四頁では、青木興勝の著作として、秋田県立図書館所蔵の「異情問答十策」を掲げるが、同書は『答問十策』の写本である。
- (20) 『蛮人白状解』（福岡県立図書館所蔵太田資料）。以下、本稿における引用は同史料による。なお、写本は九州大学九州文化史研究所所蔵三奈木黒田家文書にもある。『蛮人白状解』については、前掲、井上「福岡藩における洋学の性格」二九六～二九七頁、杉本勲「筑前蘭学関係史料―済民草書と蛮人白状解について―」（『蘭学資料研究会研究報告』第一八九号、一九六六年）二二二～二二七頁を参照。
- (21) ポルトガル人宣教師らの口述書は、『通航一覽』第五、国書刊行会、一九一三年、九五～九六頁、川村恒喜「筑前大島渡来伴天連の一行」（『福岡』第四七号、一九三二年）六～八頁に引用がある。
- (22) 『答問十策』（筑紫女学園所蔵、福岡市総合図書館所蔵マイクロフィルムによる）。以下、本稿における引用は同史料による。なお、活字本としては、『論策』（復刻版）日本史籍協会叢書別編二、東京大学出版会、一九七三年、住田正一編『日本海防史料叢書』（復刻版）第二巻、クレス出版、一九八九年などがある。いずれも末尾に水戸藩士岡野莊五郎宛の亀井南冥書簡を付し、底本は流布写本の系統である。いずれも底本が悪いせいか、不注意な誤記が目立つ。これに對して、筑紫女学園所蔵の写本は、南冥の書簡はなく、末尾に「文化元年甲子十月十四日草稿 興勝」とあり、興勝の草稿写本の系統と思われる。流布写本の系統と比べて、内容にさほどの差異はないが、第五策以下の順序が相違し、字句の異なりも目立つ。これらの相違が、南冥による手が入った結果なのか、単なる転写の際の異同なのか、にわかに判断できないが、『答問十策』を利用する際には注意を要することを指摘しておきたい。『答問十策』については、高野江基太郎「勤王家としての南冥先生」（『筑紫史談』第二集、一九一四年）三五～四二頁、同「亀井南冥、昭陽と、青木興勝」（『筑紫史談』第三集、一九一四年）五一～五三頁、藤井甚太郎「筑前藩に於ける閉鎖論（上）」（『筑紫史談』第三〇集、一九二三年）三～六頁、井野辺茂雄「新訂維新前史の研究」中文館書店、一九四二年、二〇四～二〇八頁、前掲、杉本「筑前蘭学事始考」六四～七一頁を参照。
- (23) 鳥井裕美子「ケンベルから志筑へ―日本賛美論から排外的『鎖国論』への変容―」（『季刊日本思想史』第四七号、一九九六年）二九～三〇頁を参照。
- (24) 藤田覚「鎖国祖法観の確立過程」（渡辺信夫編『近世日本の民衆文化と政治』河出書房新社、一九九二年）二七八～二九〇頁を参照。
- (25) 『通航一覽』第七、国書刊行会、一九一三年、一九三頁。
- (26) 井上忠「南冥晩年の一書簡」（『福岡地方史談話会会報』第一七号、一九七七年）二九～三〇頁を参照。
- (27) 前掲「南海紀聞」。以下、本稿における引用は同書二一、二二、四一頁による。なお、活字本としては、池田皓編『日本庶民生活史料集成』第五卷・漂流（一九六八年）、山下恒夫再編『江戸漂流記総集』第二巻、日本評論社、一九九二年などもある。『南海紀聞』については、前掲、杉本「筑前蘭学事始考」五〇～六三頁、高田茂廣「女界灘に生きた人々」海鳥社、一九九八年、二～三頁を参照。
- (28) 竹岡勝也「和学一步」と「奇観録」（『史淵』第三〇・三二合輯号、一九四四年）一九〇頁を参照。
- (29) 『南海紀聞』を用いた東南アジア史の研究としては、次のようなものがある。Nomura Toru "Magotaro: A Japanese Sailor's Record of Insular Southeast Asia in the Eighteenth Century"（『洋学史研究』第一九号、二〇〇一年）。
- (30) 鳥井裕美子「近世日本のアジア認識」（溝口雄三他編『アジアから考える』一（交錯するアジア）、東京大学出版会、一九九三年）二二五～二二三頁を参照。
- (31) 井上忠「藩校」（『福岡県史』通史編・福岡藩文化（上）、福岡県、一九九三年）四四〇頁を参照。
- (32) 前掲、杉本「筑前蘭学事始考」四三頁。

- (33) 藤田寛「松平定信」中央公論社、一九九三年、一七二―一七九頁を参照。
- (34) 松本英治「寛政期の長崎警備とロシア船来航問題」(青山学院大学文学部「紀要」第四号、二〇〇〇年)。
- (35) 木村礎・藤野保・村上直編『藩史大事典』第七巻・九州編、雄山閣、一九八五年、三五頁を参照。
- (36) 高野江鼎湖「儒侠亀井南冥」高野江鼎湖、一九二三年、二七七頁を参照。
- (37) 以下、内野元華については、許斐友次郎「筑前最初の蘭学者内野元華を憶ふ(上)(下)」(『福岡』第四二・四三号、一九三〇年)、井上忠校訂『済民草書』福岡地方史談話会、一九七六年を参照。
- (38) 前掲、許斐「筑前最初の蘭学者内野元華を憶ふ(下)」七頁。返り点については、橋本弘正氏のご教示を得た。記して鳴謝申し上げる。
- (39) 『筑前人物志料集』一(福岡県立図書館所蔵太田資料)。
- (40) 中村質「長崎の景観」(長崎県史編集委員会編『長崎県史』、外交交渉編、吉川弘文館、一九八六年)三六八―三七七頁を参照。
- (41) 小山幸伸「幕藩制下における商人資本と藩権力」(藤野保先生還暦記念会編『近世日本の社会と流通』雄山閣、一九九三年)三六五―三七九頁を参照。
- (42) 前掲『福岡藩分限帳集成』三三三頁。
- (43) 嘉永二年の平戸藩の事例であるが、このような舶来品購入の注文書が長崎開港役のもとに頻りに送られていたことが知られている。山本博文「長崎開港日記」筑摩書房、一九九九年、九六―九七頁を参照。
- (44) 前掲杉本「筑前蘭学事始考」三八頁。
- (45) 以下、猪股伝次衛門については、原平三「シーボルト事件と和蘭通詞猪股源三郎」(『日本医史学雑誌』一三三四号、一九四四年)を参照。なお、興勝の門人にあたる安部龍平の著書『新字小識』は、猪股伝次右衛門に剽窃されたといわれるが、以下に見る福岡藩と伝次右衛門の関係をふまえればあり得る話だろう。
- (46) 『阿蘭陀壹番船式番船之風説書并諸書付』(九州大学九州文化史研究所所蔵三奈木黒田家文書)。なお、九州大学九州文化史研究所所蔵三奈木黒田家文書には、同史料の他に『阿蘭陀船積荷物書付』と『阿蘭陀脇荷物書付』があり、それぞれ文化一四年と文政二年の積荷目録であるが、これらも猪股伝次右衛門が福岡藩に呈上したものである。
- (47) 西国諸藩が、阿蘭陀通詞を藩の出入りとして掌握し、長崎開港を通じて海外情報の収集にあたっていたことについては、次のような研究がある。芳即正「島津斉彬の海外情報源」(『斉彬公史料月報』二、一九八二年)、沼倉延幸「開国前後、長崎における海外情報の収集伝達活動について」(『書陵部紀要』第四七号、一九九五年)、前掲、山本「長崎開港日記」、松本「寛政期の長崎警備とロシア船来航問題」、松本英治「レザノフ来航予告情報と長崎」(片桐一男編『日蘭交流史 その人・物・情報』思文閣出版、二〇〇二年)。
- (48) 『筑前人物志料集』三(福岡県立図書館所蔵太田資料)。
- (49) 『通航一覽』第八、国書刊行会、一九二三年、二四四―二四五頁。
- (50) 森永種夫校訂「続長崎実録大成」(長崎文献叢書第一集第四巻)長崎文献社、一九七四年、二九三―三〇一頁。前掲『通航一覽』第八、二四二―二四四頁。
- (51) 日蘭学会編「日蘭交渉史研究会訳注『長崎オランダ商館日記』四、雄松堂出版、一九九二年、三三―四八頁。
- (52) 金井圓訳注「寛政十二(一八〇〇)年米船マサチューセッツ号日本長崎滞在日記」(洋学史学会研究会年報『洋学』一、八坂書房、一九九三年)二二四、二二八頁を参照。
- (53) 以下、吉雄耕牛については、片桐一男「江戸の蘭方医学事始」丸善、二〇〇〇年を参照。
- (54) 前掲、高野江「儒侠亀井南冥」二、二二四頁、井上「蘭学」三五六頁を参照。
- (55) 金井圓「日蘭交渉史の研究」思文閣出版、一九八六年、二一六―二二七頁を参照。
- (56) 片桐一男「開かれた鎖国」講談社、一九九七年、一五四―二一九頁を参照。
- (57) 日蘭学会・法政蘭学研究会編『和蘭風説書集成』下巻、吉川弘文館、一九七九年、九八頁。なお、女帝エカテリーナ二世の死去後、トルコとの戦争が勃発したという内容は誤報である。幸田成友「幸田成友著作集」第四巻、中央公論社、一九七四年、二二三頁を参照。
- (58) 前掲『和蘭風説書集成』下巻、一〇二頁。
- (59) 杉田玄白については、前掲、片桐「開かれた鎖国」一三七―一三九頁、近藤重蔵については、東京大学史料編纂所編『近藤重蔵蝦夷地関係史料』一、東京大学出版会、一九八四年、二頁を参照。
- (60) 前掲『和蘭風説書集成』下巻、九四―九六頁。
- (61) 片桐一男「和蘭風説書解題」(日蘭学会・法政蘭学研究会編『和蘭風説書集成』上巻、吉川弘文館、一九七七年)五〇―五一頁、岩下哲典「江戸のナポレオン伝説」中央公論新社、一九九九年、二二―七四頁、松本英治「オランダ商館長ドゥーフトとフヴォストフ文書」(津山洋学資料館洋学研究誌「一滴」第九号、二〇〇一年)九三―九四頁、前掲、松本「レザノフ来航予告情報と長崎」三七三―三七四頁を参照。
- (62) 対外的危機の深まりに伴う時務意識を背景に、世界地理や国際情勢を把握する手段として、藩レベルで蘭学を導入しようとする姿勢は、同じく長崎警備を課せられた佐賀藩の場合でも見られる。佐賀藩の儒者古賀穀堂は、文化三年に藩主鍋島齊直に呈した意見書『学政管見』において、「肥筑両国ハ長崎ノ御勤ニ

- テ、万国ノヲサヘヲナサルコトナレバ、何レ蘭学ノ人ハナクテ叶ワヌコトナリ、筑前ニハ蘭学ノ家アリテ長崎ノ事ニハタツサワル由、サモアルベキコトナリ」と述べ、長崎警備のためには世界地理を研究する蘭学者が必要であることを主張し、すでに蘭学を導入している福岡藩の姿勢を評価するとともに、佐賀藩においても「幸ヒ長崎モ近辺ナレハ、誰ソソノ器量アルモノヲエラバレテ、稽古ニ遣ワサルベキナリ」と述べ、蘭学導入のために藩士を長崎に遊学させることを献策している。『佐賀県教育史』第一巻・資料編（一）、佐賀県教育委員会、一九八八年、一八二頁。
- (63) 以下、緒方春朔については、伊東尾四郎「緒方春朔」（『筑紫史談』第四三集、一九二八年）、山田新一郎「本邦種痘の鼻祖贈正五位緒方春朔小伝」（『筑紫史談』第九〇集、一九四五年）を参照。
- (64) 緒方春朔種痘成功二百年記念誌『種痘必順弁』甘木朝倉医師会、一九九〇年、七一〜七二頁。
- (65) 以下、安部龍平については、大熊浅次郎「筑前蘭学の泰斗安部龍平」（『筑紫史談』第八二集、一九四二年）、鳥井裕美子「福岡の蘭学者」（朝日新聞福岡本部編『博多町人と学者の森』葦書房、一九八六年）を参照。
- (66) 前掲、高田「玄界灘に生きた人々」四二〜四五、五六〜六二頁を参照。
- (67) 『福岡県史』近世史料編・福岡藩御用帳（二）、福岡県、一九九三年、四九三・五〇八・五五四頁。
- (68) 『角川日本地名大辞典』四〇・福岡県、角川書店、一九八八年、九九八〜九九九頁を参照。
- (69) 田中圭一「柴田収蔵が生きた時代」（田中圭一編註『柴田収蔵日記』一、平凡社、一九九六年）一九〜二三頁を参照。

（開成高等学校、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇三年一月三十一日受理、二〇〇三年七月一八日審査終了）

---

## **Study in Nagasaki by Rangaku Scholar Aoki Okikatsu from the Fukuoka Feudal Domain and His Awareness of Things Foreign**

MATSUMOTO Eiji

This paper examines the study undertaken at Nagasaki by Aoki Okikatsu, a pioneering Rangaku scholar of the Fukuoka feudal domain, through the introduction of recently discovered historical materials called “Oranda Mondo”(Dutch Questions and Answers), and also investigates the type of influence that the experience of studying in Nagasaki had on Okikatsu’s awareness of things foreign. Okikatsu’s trip to Nagasaki to study there took place against the backdrop of a strong consciousness of contemporaneous matters on the part of the Fukuoka feudal domain, which was in charge of guarding Nagasaki and for which gaining an understanding of world geography and the international situation was indispensable. The Fukuoka domain was charged with stationing guards at the feudal lord’s warehouses in Nagasaki and through taking on the task of Dutch translation they collected information about other countries. For Okikatsu, who was stationed at the feudal lord’s warehouses as a purchasing official, this kind of environment was a huge factor in the advancement in his studies.

At that time in Nagasaki, the arrival of Russian ships posed a problem for the Nagasaki garrison, trade between Japan and Holland was being conducted using chartered American ships, and it was a period of great change in the international situation as it pertained to Japan, as exemplified by disturbances in Europe and Asia reported in *Oranda Fusetsugaki* (Reports from Holland). These changes in the international situation had a significant effect on Okikatsu’s awareness about the outside, and gave rise to anti-foreign assertions regarding such issues as the harmful effects of foreign trade, the strengthening of Japan’s “sakoku” (isolationist) policy, and the bolstering of its sea defenses. Okikatsu’s Rangaku, was not a genuine pursuit of national sciences, but rather was a study of world geography and the international situation considered necessary by the Fukuoka domain to assume their garrison duties in Nagasaki. Consequently, one major feature of the domain’s Rangaku is its basis, which lay in a timely awareness of a deepening in an international crisis. This type of characteristic is similar to the cases of Shunsaku Ogata, a vaccination physician belonging to a branch domain called the Akizuki domain, who went to Nagasaki at virtually the same time to study Rangaku, and Abe Ryuhei, Okikatsu’s student.

Although it is generally said that Rangaku began with the fields of natural science such as medicine and botany, in the case of the Fukuoka domain a concerted effort to study Rangaku began with a study of world geography and the international situation. Under such circumstances, the position of the Fukuoka domain was one of being assigned the militaristic role of guarding Nagasaki, for which reason it became highly aware of the external threat without regard to social class. We may, therefore, interpret this as a regional characteristic that gave rise to the origin of Rangaku in the Fukuoka domain.